

The TENDAI journal

発行所：天台宗出版室
発行人：出版室長 小林 祖承
〒520-0113 大津市坂本4-6-2
天台宗務庁内 電話：077-579-0022(代)
Eメール：T-Press@tendai.or.jp

令和3(2021)年7月1日 木曜日
(毎月1日発行) 1部50円(消費税込・送料別)

天台ジャーナル



宗祖伝教大師一千二百年大遠忌御祥当法要

十年間に亘る祖師先徳鑽仰大法会の掉尾ちようびを飾る宗祖伝教大師一千二百年大遠忌御祥当法要が6月3日～5日、比叡山延暦寺大講堂において厳かに執り行われた。コロナ禍による感染防止対策として出仕や随喜者数を制限したが、法要の様子は3日間ともに初のインターネットを通じた全国中継を実施。連日の法要では伝教大師の遺徳を偲ぶ「伝教大師和讃」が唱えられ、宗祖への報恩謝徳が示された。

宗祖伝教大師一千二百年大遠忌御祥当法要は、3日の御祥当遠夜法要を伝教大師御影供、4日の御祥当法要を常行三昧、5日の御祥当後法要を胎蔵界曼荼羅供で厳修した。

当初は、3日に教宗派の代表者、大乘連盟、伝教大師連盟の方々による随喜、4日は宗務所長の出仕と宗機顧問、門跡大寺、法灯護持会、魅力交流委員の参列。そして5日は一般参拝者にも開放する予定だったが、新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から内容を一部変更して営み、当初

から決まっていたインターネットによるライブ配信を通じて各寺院や自宅からの随喜を事前に呼びかけていた。

祥当日前日の3日は、森川宏映天台座主親下を大導師に、延暦寺一山住職が出仕。内陣須弥壇中央に奉安された伝教大師御影に、功績を讃えた祭文が朗々と奉じられた。

ご命日の4日は、午前中に御廟の浄土院で論議法要「長講会」が執り行われ、午後から祥当法要を厳修。根本中堂から分灯された不滅の法灯を先頭に出仕僧らが入堂し、大導師の森川天台座主親下

が法則で伝教大師に報謝を捧げられた。

最終日となる5日の御祥当後法要は、大樹孝啓探題大僧正を大阿闍梨に天台宗・延暦寺内局員、延暦寺一山住職の出仕で勤められ、宗祖への恩徳が示された。

4日の祥当法要で挨拶した阿部昌宏宗務総長は「人々を救済するために、最澄さまは私たち、そして皆さまの側におられます。共に正しい修行に努め、自らの心の中の仏性を磨きましよう」と、すべての人びとに呼びかけた。

極微ごくみ

春から夏にかけて、空を勢よく飛び回るツバメの姿に心がなごむ。スピードある飛行姿は見ていて気持ちが良い。鳴き声もよく耳に届く。「土食で虫食で渋い」と鳴いているそうだが、繁殖期になると、その鳴き声がよく聞かれる▼ツバメは穀物を食べ荒らす虫などを食べるため、昔から「益鳥」として大切に扱われ、殺したり雛を落としたりすることを禁ずる慣習が人々の間にあった。また、ツバメは、カラスなどの天敵を避けるために人家の出入り口など人目のつく場所に巣を作る。そのため、人の出入りが多い象徴として「商売繁盛」の印ともいわれたようだ。これほどまで人間に温かく接してもらえぬ鳥はいないだろう▼人間から好意的に見られるツバメだが、迷惑なのは「フン害」である。しかし、これも人間の方が譲歩して、フン害を蒙らない工夫をこらすことが多い。段ボール紙でフン取りを作ったり、出入り口に注意書きを張ったりと、ツバメ優先の日常である▼8月も半ばを過ぎる頃から、子育てを終えたツバメたちは、南方へと旅立つ。その頃になると、人間たちも秋に思いを馳せるようになる。ツバメたちは人間に名残を惜しまれながら去っていくが、今年は早く去って欲しいものがある。新型コロナウイルスだ。「越冬ツバメ」ならぬ「越冬ウイルス」にならぬように居座られるのは御免蒙りたいものだ。